

琉球大学学術リポジトリ

ネオ沖縄語の出現とシマクトゥバの消失

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2015-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎原, 正志, Sakihara, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31114

【研究論文】

ネオ沖縄語の出現とシマクトゥバの消失

崎原 正志*

Emergence of a Neo Okinawan and Extinction of Ancestral Languages¹

SAKIHARA Masashi*

要旨

ハワイのシマクトゥバであるハワイ語の言語復興以後、NEO Hawaiian と呼ばれる第二言語話者が話すハワイ語が普及しており、伝統的なハワイ語 TRAD Hawaiian を圧迫している。琉球列島におけるシマクトゥバにおいても沖縄島中南部を中心に新しいかたちのシマクトゥバ NEO Okinawan が生まれつつある。大学などの学校教育におけるシマクトゥバ教育がそれぞれの地域に存在する多様なシマクトゥバたちの標準化・画一化を助長する可能性があるため、シマクトゥバの最大の魅力である多様性を残しながらのシマクトゥバ教育でなければならない。

Abstract

After the long years of campaigning language revitalization in Hawai‘i, a new type of Hawaiian language called NEO Hawaiian has been expanded by the second language learners of NEO Hawaiian and oppressing the traditional Hawaiian language(s) (TRAD Hawaiian). The similar phenomenon, the advent of a neo-Okinawan language (NEO Okinawan), can also be confirmed on the Ryukyu Islands, particularly in the south-central region of Okinawa Island. Teaching only NEO Okinawan at academic institutions, such as universities, has possibility to accelerate standardization of traditional languages and dialects. Ancestral language education must aim to preserve all varieties of traditional languages and dialects in danger.

*琉球大学大学院人文社会科学研究科博士課程後期。masashisakihara@gmail.com. Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus. 本論は2014年9月17日にEWC/EWCA International Conference in Okinawaで発表した原稿に加筆・修正をくわえたものである。

はじめに

シマは沖縄のことばである一定の人々の集団によって形成された村落・集落を意味する。かつて同じシマの人たちは同じ水源を分けあい、お互いに助けあいながら生活を営んでいた。しばしば周辺のシマの人たちとの交流もあったが、自分の生まれ育ったシマを日常生活の基盤とし、原則として、ほかのシマの人と結婚することは許されていなかった。そのためシマで用いられることばはそれぞれのシマで多様に変化し、「水がかわればことばもかわる」と言われるほど、それぞれのシマのことばはそのシマ独特のものになった。

シマクトゥバとは沖縄のことばで「シマのことば」、つまり「ふるさとのことば」を意味する。シマクトゥバという表現は、シマグチ、スマムニなど地域によってさまざまだが、ここでは便宜上シマクトゥバを用いることにする。シマクトゥバは広義として琉球列島の各々の地域で伝統的に話されてきたことばを含むだけでなく、日本全国、そして、全世界の各々の地域で伝統的に話されてきた地域言語・方言なども含んだ表現である。しかし本論では琉球列島で話されてきた地域のことばを中心に論じるため、とくに断りがない限りは、狭義としてのシマクトゥバである「琉球列島のシマクトゥバ」を指す。シマクトゥバは奄美列島・沖縄島および周辺離島、宮古列島、八重山列島、与那国島の諸言語・方言を含み、さらに北・南大東島地方の八丈島方言（八丈語）も含む。つまり、シマクトゥバは琉球諸語ではじきだされてしまう言語も内包する。

現在、シマクトゥバの議論や活動、研究などさまざまなレベルでシマクトゥバが取りあげられ、見直されつつあるが、その動向には大きく分けて2つの方向性が認められる。

ひとつは、かりまた（2011）や下地（『沖縄タイムス』2013）、松原（2014）、その他多くの研究者や知識人たちが述べているようなシマクトゥバ（あるいは琉球諸語）の多様性を保全することの重要性を強調（あるいは示唆）する立場である。かりまた（2011）では、琉球列島の地図を日本列島の本州の地図とかさねて、最北端の喜界島を仙台市と重ねたら、西端の与那国島は岡山県と広島県の県境に重なると述べ、「（これらの）両端の方言では会話が成り立たないほどの言語差がある」とシマクトゥバの多様性について地理的なイメージ化によって明快な説明を加えている（同上: p. 6）。さらに「奄美大島の一番北の佐仁の方言には母音が11個あるが、「与那国の方言は、原則として母音が「a, i, u」の3母音」であることなど、言語学的な観点からもシマクトゥバの多様性について検証している（同上: p. 8）。

ふたつめは、沖縄タイムス2014年8月10日の一面に記載された大城立裕氏による「言葉の独立 自立に力」の記事にみられるようなシマクトゥバ（あるいは琉球諸語）の標準化・画一化を提唱する立場である²。当記事によると、大城氏は「ウチナーグチを大事にする意識が今日、高まっているのは素晴らしいこと。だが、島々

の別々の島言葉を大事にしたいと思いつつも、宮古や八重山など各地域間では、話が通じないために共通語としての日本語を使っている。ウチナーグチが現在の沖縄で滅びつつあるのは、日本共通語に滅ぼされつつあるのだと考えてよい。島々の言葉を大事にすることも重要だが、お互いに通じないから全体を統一する標準語が必要。文化的自立が精神的自立につながる」と述べ、お互いが通じるための標準語を作る必要性を主張し、そのことがさらに文化的・精神的自立を促進するとしている。

しかしながら、同じく言語復興運動が盛んなハワイの「土地を大事にすること (mālama ‘āina)」や「祖先 (kupuna) とつながる」という思想や精神観をシマクトゥバにも当てはめてみると、シマクトゥバを標準化すればそれぞれの土地や祖先と切り離されてしまうことになり、シマクトゥバの多様性も失われてしまうだろう³。シマクトゥバの標準化ではなく、それぞれの地域のシマクトゥバを残していくことこそが、土地や祖先とのつながりが保たれ、文化的・精神的自立につながるのではないだろうか。

さらに、それぞれのシマクトゥバには独特の音声や文法体系が存在し、言語学的観点からもそれぞれのシマクトゥバを残す意義がある。標準化によってこれらの言語体系が失われてしまうなら、標準化は望ましくない。

したがって、本論は、前者のシマクトゥバの多様性を重視する立場を取り、シマクトゥバの標準化・画一化の動きによって生じた新しいかたちのシマクトゥバについて、具体的な用例を示しながら検証し、シマクトゥバの多様性を保全することの重要性を論じることを目的とする。

第一章では、ハワイのシマクトゥバであるハワイ語の概要と、ハワイ語における標準化・画一化現象について述べる。第二章では、シマクトゥバおよび琉球諸語の概要と琉球列島のシマクトゥバのひとつである沖縄語における標準化・画一化現象について述べる。第三章では第一章と第二章で述べたことを踏まえて、シマクトゥバ教育はどのようにあるべきかを提示し、最後に少しばかり具体的な提案を述べる。

1. ハワイ語

1-1. 「ハワイ語」とは

本論でいう「ハワイ語」とは、ハワイ諸島の先住民であるハワイ人によって話されてきた言語に由来するさまざまなヴァリエーションの総称である。詳しくは後述するが、必ずしも伝統的なハワイ語だけを指さない。18世紀のクック船長の来布後、ハワイに宣教に来た宣教師たちがハワイ語の表記法を定め、発音・文法などが変化した (Schütz 1994)⁴。しかし、ニイハウ島は Elizabeth Sinclair が島民ごと島を購入し、島民にハワイ語で生活することを求めたため、この影響による変化は少なかったとされる。これにより、ニイハウ島の言語とそれ以外の島で話されている言

語に差異が生じた⁵。

1-2. 「ハワイ語」にはどのようなものがあるか

大別するとNIIHAUとHIKINAに分けられる。これらは伝統的に話されてきた地域語としてのハワイ語（以下 TRAD HAW）である。NIIHAU はニイハウ島で主に話されているが、ニイハウ島外のニイハウ人のコミュニティでも話されている。HIKINA はニイハウ島以外の島々⁶で話されているハワイ語（の変種）の総称である⁷。

これに対して、NEO Hawaiian あるいは通称 UH Hawaiian（UH=University of Hawai'i）とも呼ばれるハワイ語がある（以下 NEO HAW）。NEO HAW は第二言語話者（以下 L2）によって話されている新種のハワイ語のことである。NEO HAW はハワイ島（ビッグ・アイランドとも呼ばれる）の地域的変種がベースになっている。その由来は諸々あると思われるが、注目すべきは、ハワイ島出身の言語学者 Kawena Pukui 氏が言語学者 Samuel Elbert と共にハワイ語（厳密に言えば、ハワイ島で話されているハワイ語の変種）の辞書（Pukui & Elbert 1986）を作り、文法書（Elbert & Pukui 1979）を刊行したことである。NeSmith（2012）によれば、言語復興運動の際、L2 たちはこの辞書と文法書を基に実質ハワイ語を標準化・画一化し、大学で教え、大学で NEO HAW を学んだ L2 たちが今度は Pūnanaleo や immersion school などの教師となり NEO HAW を普及させた。

しかし、実際には、ハワイ語内にも地域によって多様性があることが指摘されている（Elbert & Pukui 1979; Piccolo 2005）。また、Piccolo（2005）ではハワイ語のさまざまな変種に関する調査・研究の必要性が言及されている。

1-3. NEO の出現について

1980 年代以降、言語復興運動の盛り上がりによってハワイ語の話者人口は増加している。しかしながら、NeSmith（2003）は、増えているのは TRAD HAW の話者ではなく、NEO HAW を話す L2 であると指摘する。NeSmith は、ハワイ語が TRAD HAW が NEO HAW の使用拡大および話者数増加により圧迫されていて、TRAD HAW が継承されず、衰退していくことに警笛を鳴らしている。ハワイ大学におけるプログラムやカリキュラムだけをみていくと目をみはるものがあるが、実際にはこのようなプログラムやカリキュラムを通じて NEO HAW の普及が促進されてきた。

NEO HAW と TRAD HAW の差異は音声・語い・文法・表記の面において顕著である⁸。もっとも重要なのは NeSmith（2003）や NeSmith（2012）では NEO HAW がネイティブスピーカー（L1 話者）の視点や精神思想などを反映させておらず、L2 の視点や考え方で成り立っていると指摘していることである。その結果、音声・文法・語い・表記など言語学的な違いのみならず、精神世界や思想、表現方法においても

両者の違いが顕著になってしまったと分析している。

1-4. 「第一章：ハワイ語」のまとめ

ハワイ大学の積極的なハワイ語教育によって NEO HAW が出現・拡大している。TRAD HAW が NEO HAW により圧迫され、存続の危機にあやぶまれている。TRAD HAW をどこまで保全できるかが課題である。TRAD HAW の文法研究や辞書が不足しているが、大学でのハワイ語プログラムは非常に充実しているし、言語復興や教育の研究も進んでいる。したがって、充実したプログラムやカリキュラムの中でどのように TRAD を保全し継承していくのか、今後の動向が気になるところである。

2. シマクトゥバ

2-1. シマクトゥバにはどのようなものがあるか

2009 年にユネスコが琉球列島に存在する危機言語として、北から奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の 6 つを発表した。しかし、ユネスコのこの区分に関してはさまざまな意見や批判がある。例えば、国頭語に関しては、「国頭」が指し示す以外の地域も含むので、「奄美南部・沖縄北部方言（語）」とするべきという意見および批判がある。また、「沖縄」という語は一般的に沖縄島北部地域も含むので「沖縄語」という呼び方についても課題が残る。したがって、厳密には、「奄美北部方言」「奄美南部・沖縄北部方言」「沖縄中南部方言」「宮古方言」「八重山方言」「与那国方言」、あるいはもう少し細かく分類しなければならない可能性もある⁹。

一方で、Pellard (2013) によれば、いくつかの研究では「国頭語」や「奄美南部・沖縄北部方言」という区分を支持しない論が展開されている。これらの研究では「歴史・系統的に」奄美南部（与論・沖永良部島方言）は「奄美語」に含められ、沖縄北部方言は「沖縄語」に含められる（すなわち「奄美語」「沖縄語」「宮古語」「八重山語」「与那国語」と 5 つに分類される）。

いずれにせよ、琉球列島内で話されていることばに多様性が認められ、シマクトゥバ内での差異が大きいことは上村（1997）やかりまた（2004）などの多くの先行研究ですでに述べられているため本論では省略する。

そして沖縄語内においても、発音、語い、文法に地域差が認められ、多様性があるにも関わらず、今日、新しいかたちの沖縄語・NEO Okinawan が生みだされつつある。これは首里・那覇方言の影響によるもの大きい¹⁰。次にネオ沖縄語・NEO Okinawan について詳しく述べる。

2-2. NEO Okinawan の出現

第一章でハワイ語の新種である NEO HAW について述べたが、シマクトゥバのひ

とつである沖縄語にも新種のネオ沖縄語・NEO Okinawan（以下 NEO OKI）が認められる。NEO OKI は首里・那覇方言の影響を受けた地域性を失った新種の沖縄中南部方言のことを指す¹¹。厳密には、NEO OKI に移行する中途段階というべきだろう。

NEO OKI の出現の理由はさまざまと思われるが、「（首里言葉は）琉球の標準語でどこでも通用し、話しやすい上品な言葉」（『琉球新報』2001）や「首里方言は琉球方言の標準語ともいえる位置にあった方言」（『沖縄語辞典』：p.1）という発言や記述に見られるように、シマクトゥバ復興に携わっている人々を中心に、あるいは一般の人々にも首里方言（または首里語）＝標準語である、あるいは標準語にするべきである、という考えが根付いていることと無関係ではないだろう。管見だが、このような認識は一般の人たちを対象としたシマクトゥバ復興に関する公開講座においてたとえ意識的でなくとも発信され、拡大している可能性があることを指摘しておく¹²。

いずれにせよ、NEO OKI の出現は否定できない。とくに、以下で説明するように音声および語いの面で変異している。

2-2-1. 音声

2-2-1-1. 声門閉鎖音 (?) とグラジュアルビギニングの区別の変異

沖縄中南部方言の多くは、声門閉鎖音 (?) が語頭で発音される語いと、グラジュアルビギニングと呼ばれてきた「ゆるやかな声たて」（言語学では *reverted apostrophe* で表される）で始まるものと区別される。

- 1) ?wa: (豚)
 ‘wa (私)
- 2) ?ja: (おまえ)
 ‘ja: (家)

しかし、糸満方言や西原町小那覇方言などのように伝統的にこのような区別がない中南部方言も存在する（糸満：名嘉真 1988, p.1; 西原：西原町史編集委員会 2010: p. 398）。現在は、この区別を保全しようとする動きにより、もともとこの区別がない地域方言にもこの区別を求める傾向があり、この区別が強く認識されつつある。

2-2-1-2. d 音の普及

沖縄中南部方言において、d 音が優勢（あるいは d 音と r 音が単語の意味上区別されている）な地域方言と、r 音が優勢（あるいは d 音と r 音の区別がない）な地域方言が存在する。

図 1：d 音優勢方言と r 音優勢方言の語い比較一覧

	首里 ¹³	浦添・城間 ¹⁴	那覇方言 ¹⁵
盗人	nusudu:	nusuru ¹⁶	nusuru
友だち	dushi	rushi	rushi
涙ぐむさま	nadaguruma:i	naraguruma:i	naraguruguru:

上記の用例では、首里方言が d 音優勢方言で、浦添・城間方言と那覇方言は r 音優勢方言である。d 音優勢方言にはほかに、石川方言、奥武方言などがあり、r 音優勢方言には、糸満方言、久高方言などがある（平山ほか 1966: p. 115）。

しかし、NEO OKI においては d 音が優勢であり、r 音は敬遠さみである。ただし、単語によっては r 音が普及している例もある（例：ヤールー／ja:ru:／「やもり」）。

2-2-2. 語い

かりまた（2013）をもじって、危機的な状況にある語いを「endangered 語い」、広く使用され勢力の強い語いを「killer 語い」とし、以下のように図にまとめた。ここでいう killer 語いは NEO OKI の語いのことを指す。

図 2：endangered 語いと killer 語い

endangered 語い	killer (NEO OKI) 語い
～サイ（男女）／ 使用しない	～サイ（男）、～タイ（女）
クゥイン	カムン
ミセーン（ミソーレー、チャーギレー）	ウサガユン（ウサガミソーレー）
メーン、モーイン	（イ）メンセーン
ハーメー	ンメー
ナー	ウンジュ
イガルー、イガナー	ワッター
タマグティンプラ、サーターティンプラ	サーターアング（一）ギー

2-2-2-1. ハイタイ／ハイサイ

ハイタイ／ハイサイは、「親しい目上の人（先輩など）に会った際に用いられる挨拶」で、都市部（首里・那覇）を中心に使用されていたと思われるが、NEO OKI では、男はハイサイ、女はハイタイを用いるべきだという認識が拡大している。2013 年 9 月 15 日・琉球新報掲載の「座談会：しまくとうば再生」にて、女性歌手が「女性が「ハイサイ」と言うことに「あいやー」と思う。「女性はハイタイだよ」と言っても、ハイサイが全国的に一人歩きしている」というエピソードを述べていることから、この現象を裏付けることができる。むしろ、「ハイサイ＝男性、ハイタ

イ＝女性」が一人歩きしている。

『浦添・小湾方言辞典』によると、「ハイ、チバンシェーミ（こんにちは頑張っておられますか）」と、～タイ／サイが使用されていない（同上: p. 227）。また、儀間（2000）によると、首里・那覇以外では男女とも～サイを使用している地域が多いという（同上: p. 28）。

2-2-2-2. 食べる＝カムン（命令形カメー）

カムンは、主に「食べる」を表す動詞である。NEO OKI では「食べる」という意味でカムンが基本的に用いられているが、『宜野湾の方言』によると、昔はクッインと言っていたという記述がある（宜野湾市教育委員会 1985: p. 42）。さらに、目上の人の「食べる」という動作に対してウサガユン（ウサガミソーレー）を多く用いているが、ミセーン（ミソーレー）などのその他の表現はあまり用いられなくなってきている。目上への表現としてほかにチャーギレー（具志川、石川など）、カーギレー（名護・幸喜）という表現もある。

2-2-2-3. いらっしゃい＝メンソーレー

メンソーレーは、動詞メンセーンの命令形で、「いらっしゃい（welcome）」を意味する。空港やホテルなどの看板・広告によく用いられるため、観光産業での多用により普及したと思われる。地方では「モーイン（モーレー）」、「メーン」という表現もある。敬語表現ではあるが、都市部においては丁寧度はあまり高くなく、士族から平民に対して使用されたりしていたため、これらのことばは「品がない」として忌避される。

2-2-2-4. おばあちゃん＝ンメー

祖母を表す言葉には、ンメーのほかにハーメーやハンシーなどのことばがあるが、これらはNEO OKI ではあまり用いられない。とくに、ハーメーは「品がない」として忌避される。かつては平民階級のおばあさんのことを指すことばであったからであろう。ハンシーは旧那覇地区¹⁷における士族のおばあさんにいう語である。

2-2-2-5. ウンジュ（あなた）

首里・那覇方言においてウンジュは二人称代名詞の丁寧なかたちである（ぞんざいなかたちは？ヤーという）。首里・那覇以外の地域では主にナーというかたちが目上の相手を指す場合に用いられていたが、NEO OKI では、目上にはもっぱらウンジュが使用され、ナーはほとんど使われなくなってきた。

2-2-2-6. ワッター

ワッターは一人称複数を表す代名詞である。首里・那覇方言には一人称複数の代名詞はワッターの一語のみである。しかし、首里・那覇以外の地域、例えば、宜野湾地域（現宜野湾市）の方言には、ワッターのほかにイガルーやイガナーなどイガ系のことばがあるが、これらは廃れつつある（宜野湾市教育委員会 1985: p. 23）。イガ系の一人称代名詞を使用する地域では、イガ系が聞き手を含んだ包括形、ワッターが聞き手を含まない排除形として区別している¹⁸。

2-2-2-7. サーターアング（一）ギー

サーターアングギーは小麦粉に水・卵・砂糖などを原料に沖縄各地で作られるお菓子である。直訳すると、砂糖（の）揚げ物である。しかし、地域によっては、サーターティンプラ（砂糖天ぷら）、タマグティンプラ（卵天ぷら）などと呼ばれる。砂糖を入れた揚げ物にとらえるのか、砂糖あるいは卵の入った天ぷらにとらえるのか、名付けにその土地の人々の感覚や世界観が表れている。しかし、NEO OKI ではサーターアング（一）ギーが優勢である。

2-2-3. 文法

文法は沖縄語内では違いは少ないので、文法で標準化しているものは多くはないと思われる。ただし今後、NEO OKIの影響により、首里・那覇方言に特有の文法体系が使用されたり、あるいは首里・那覇方言にはみられない文法体系が失われたりする可能性がある。たとえば、田代（2012）によると、モノの「ありか」を表す格助詞-nakai（「～に」に相当）は具志川集落の調査では一度も使用されることはなかったが、旧屋取集落、あるいは屋取集落の影響が大きい地域・集落では使用されることがあったという（同上: p. 89）。屋取集落は廃藩置県前後に首里・那覇・泊などの都市部から職を失った士族階級の人たちが田舎に移住してできた集落のことである。したがって、屋取集落で使用されることばは周辺の伝統集落のことばの影響もある程度うけているが、基本的には首里・那覇などの都市部のことばと同系統のことばであるといえることができる¹⁹。-nakai を使用していなかった方言でも-nakai を使用するようになるなど、屋取集落の方言が NEO OKI の出現と関わっている可能性も指摘しておく。

2-3. 「第二章：シマクトゥバ」のまとめ

沖縄中南部方言において NEO OKI が出現しつつある。TRAD をどこまで保全できるかがハワイ語とシマクトゥバの両言語において共通の課題であり、言語復興はことばの多様性を残すことを意識したものでなければならない。

シマクトゥバはハワイ語と違って、最低でも 5 つの異なる言語が存在し、その下

位にさまざまな地域方言（約 800-900 といわれる）があり多様性に富む（ただし、ハワイ語にもいくらか多様性はある）。これらの言語や個々の地域方言をもれなく保全できるような方法が必要である。なぜなら、ひとつの地域方言だけを中心に教えればそれだけが普及してしまう危険性があるからである。

3. シマクトゥバ教育はどうあるべきか

2014 年 9 月 1 日、しまくとうば連絡協議会は「しまくとうばの保護・強化に関する条例の制定を、県や県教育庁、県議会に陳情」、「条例案を作成し、全学年で通常の教育課程での学校教育に導入すること」などを求めた（『沖縄タイムス』2014 年 9 月 2 日）。

シマクトゥバの使用が禁止され、人々が劣等感を抱いていたころと比べれば、この活動自体は評価されるべきことではあるが、NEO OKI が生まれつつあるシマクトゥバの現状において、学校教育への導入は、はたしてシマクトゥバの多様性の保全に有益となるだろうか。

ハワイの事例にみるように、学校でのシマクトゥバ教育が NEO HAW や NEO OKI のような新種のシマクトゥバを生みだし言語の多様性を失わせてしまう危険性ははらんでいる。そのため、学校現場へのシマクトゥバ教育の導入は非常に慎重に行われなければならない。

ただし、かりまた（2012）でも指摘されているように、ここでいうシマクトゥバ教育とは語学としてのシマクトゥバ教育であり、シマクトゥバについてのシマクトゥバ教育とは区別しなければならない。語学としてのシマクトゥバ教育を実施するにはまだまだ検討すべき課題が残るが、シマクトゥバ教育を学校で実施するのなら、シマクトゥバについての教育は今すぐにでも行われるべきである。多くの子どもたちがシマクトゥバについて知ることによって自分のシマクトゥバとはなにか、自分はシマクトゥバに対してどう接するべきかなど、考える機会を与えることになり、シマクトゥバの保全につながっていくからである。

現在の状況では学校現場でシマクトゥバ教育を推進することに消極的にならざるをえない。各々の地域で、各々の地域のことばが使われて、継承されるようになってこそ、学校という組織も積極的に動けるようになるだろう。なぜなら、何度も繰り返すが、ハワイでは学校でのシマクトゥバ教育がハワイ語の NEO HAW のような言語を生みだすきっかけを与え、沖縄においても実際に新種のシマクトゥバである NEO OKI が生まれつつあるからである。シマクトゥバは多様性を残しながらの言語復興がまだまだ可能であり、ひとつひとつの地域方言が保全されて継承される道をまだすててはいけない。

まとめ

今現在、学校教育へのシマクトゥバ教育導入を考えるなら、シマクトゥバについての教育が先に行われるべきであろう。語学としてのシマクトゥバ教育についても同時に議論・検討しつつ、理想的なかたちでそれを将来、実現するために、各地域が自分たちのことば（スマムニ、シマグチ、シマクトゥバ）を保全し継承していく活動を今以上に活発化させ、それぞれのシマクトゥバが保全されるような体制を整える必要がある。

提案としては、シマごとに存在する公民館あるいは郷友会単位でシマクトゥバの普及活動を行い、それぞれのシマクトゥバが学べるような環境を整え、そして、県や大学、研究機関などがそれぞれのシマや自治体の活動を支援するというかたちが望ましい²⁰。

ネイティブスピーカーが健在の今、シマクトゥバの多様性を保全するために、各地域のシマクトゥバの音声・語い・文法などの記述研究が盛んに行われている。シマクトゥバには、保全および研究対象の言語・方言が 800～900 あると言われている。地域によってはさまざまな事由により活動することが難しい地域もあると思われるため、このような「書き残す」という作業も重要になってくる。「書き残す」作業は研究者でなくてもできる。専門的な分析は研究者に任せるとしても、発音や語いなどの記述は話者本人だけでなく、話者から聞き取りすることで誰でも行うことができる。

そのために最も大切なのは、各地域の人々が NEO OKI のような抽象的なシマクトゥバではなく、自分たちの地域のことば＝「母語・ふるさとの言葉 **ancestral languages**（シマクトゥバ、スマムニ、シマグチ）」を残したいという意志を持つことである。シマクトゥバ（各地域のことば）がなくなれば、その地域の人たちが育んできたシマクトゥバに内在する「歴史」や「生活」そのものが失われてしまう。その各々の具体的な「歴史」や「生活」をくしる・ほりおこす・つたえるというサイクルを作っていく作業が言語復興に最も必要な理由・動機だと思われるし、それが脱標準化や土地や先祖とつながるといふ、つまり大城立裕氏のいう文化的・精神的自立につながっていくのではないだろうか。

【注記】

¹⁾ The word “ancestral language” is a translation equivalent to the Okinawan term *shimakutuba*. The word “indigenous” would be used more in general in the similar context, but “indigenous” excludes those people who do not live in the communities that their ancestors are from, but wish to pursue their roots through ancestral language learning. “Ancestral” fits more to my argument since it focuses on ancestral heritage.

²⁾ (おもに沖縄語における) シマクトゥバの表記法についても標準化しようとする動きがみられる(宮里他 2006: p. [1]) が、松原 (2014) では「正書法なんかいらぬ。身体に流れる、それぞれの言葉を自由な言語表現に利用したらいいのだ」と標準化とは反対の意見が述べ

- られている。
- 3) ハワイの *indigenous theory* については University of Hawai'i (2007) を参考にした。
 - 4) 一例を挙げると、t 音が k 音で発音されるようになった。
 - 5) ハワイ語の歴史の詳細については、Schütz (1994)、NeSmith (2012) の第二章を参照された
い。
 - 6) つまり、西からカウアイ島、オアフ島、マウイ島、モロカイ島、ハワイ島である。ラナイ島
については未調査である。
 - 7) NIIHAU と HIKINA という用語は Keao NeSmith との個人的なメールのやりとりの中で出てき
た言葉で、言語学的に定まった用語ではなく、これらを指し示す適切な言語学的用語が現
時点では存在しないため暫定的な名づけである。
 - 8) 詳しくは NeSmith (2003: pp.71-72) を参照されたい。
 - 9) 例えば、久高島方言（沖縄北部方言と音声上の共通点がある）、多良間島方言（八重山方言
との語法的・文法的共通点がある）などは分類が難しい。
 - 10) 首里・那覇方言だけでなく、それぞれの地域にも中心的な方言がある。例えば、八重山語に
おいては石垣四箇方言が周囲の地域語に影響を与えている。したがって、八重山語に含ま
れる白保方言は、王国の中心地である首里・那覇の方言、八重山の中心地である石垣の方
言の影響を受け、現在は日本という国の標準語である日本語、さらに、世界共通語である
英語の脅威にさらされており、このような周辺の地域語は首里・那覇などの中心地の言語
に比べて、より危機的な状況に置かれている。このようなことは、かりまた (2013)、外
間 (2000: pp. 19-20) などですでに述べられている。
 - 11) 比嘉光龍氏はこれを「共通語的」と言い表している（沖縄大学地域研究所 2013: pp. 202-203）。
 - 12) 筆者はあるシマクトゥバに関する公開講座に参加した時、首里・那覇辺り出身の人が他地域
出身の人の使用するシマクトゥバを訂正したり、私のシマでは使わない表現だと言って指
摘する光景を何度か目にした。
 - 13) 『沖縄語辞典』より。
 - 14) 『城間字誌 第三巻 城間の方言』より。
 - 15) 『沖縄語辞典—那覇方言を中心に』より。
 - 16) 『城間字誌』によると、浦添・城間方言の r 音は、音声的には ?（歯茎入破音）である。
 - 17) かつては「那覇」と言えば、東町・西町・若狭町・泉崎町の 4 町のことを指していた。久米
や辻が隣接し、港町として栄えた。那覇方言の特徴として、d 音を r 音で発音することな
どが挙げられる（例：dusi→rusi 友だち）。
 - 18) 多くの琉球諸語でみられる現象である。八重山語白保方言では、ペーマ系が包括形で、パイ
マ系を排除形としている。ハワイ語でも kāua, kākou が包括形、māua, mākou が排除形であ
る。
 - 19) ただし、沖縄島北部・本部（もとぶ）地域の屋取集落の方言のように、周辺の伝統集落のこ
とばの影響が非常に大きく、都市部の方言（首里・那覇方言）の特徴をあまり保持してい
ないような方言もある。
 - 20) シマ内に違うルーツを持つ人々が混在している現代社会において、シマのことばだけを教え
ていくのがよいのか、どのシマのシマクトゥバを教えるのがよいのかについては触れてい
ないため、今後の課題である。現段階ではそのシマではそのシマのシマクトゥバを教える
のがよいと思われるが、それによって排除されてしまう住民もいることを意識し続け、議
論していくことは重要である。

【参考文献】

内間直仁・野原三義 (2006) 『沖縄語辞典—那覇方言を中心に—』 研究社、東京。
 沖縄大学地域研究所 (2013) 『琉球諸語の復興』 芙蓉書房出版、東京。

- 『沖縄タイムス』(2013 年 11 月 19 日)「琉球語の多様性「議論が不十分」下地准教授継承へ提言」
- 『沖縄タイムス』(2014 年 8 月 10 日)「言葉の独立 自立に力」1 面
- 『沖縄タイムス』(2014 年 9 月 2 日)「しまくとぅば学校教育で:連絡協 県に保護強化求める」
- 上村幸雄 (1997)「琉球列島の言語 (総説)」亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 セレクション—日本列島の言語』pp. 311-354、三省堂、東京。
- かりまたしげひさ (2004)「危機言語としての琉球語の文法研究の課題」『日本東洋文化論集 (琉球大学法文学部紀要)』第 10 号、pp. 57-77、琉球大学法文学部、西原 (沖縄)。
- かりまたしげひさ (2011)「琉球方言から考える言語多様性と文化多様性の危機」『国立国語研究所 第 3 回国際学術フォーラム:日本の方言の多様性を守るために』、pp. 4-11、国立国語研究所、東京。
- かりまたしげひさ (2012)「多様な琉球方言をいかに継承するか—課題と可能性を考える」『第二回法文学部地域貢献フォーラム (配布資料)』
- かりまたしげひさ (2013)「endangered language と killer language」比嘉豊光編『「時の眼—沖縄」批評誌 N27』創刊号、pp. 94-97、新星出版、那覇。
- 宜野湾市教育委員会編 (1985)『方言 (宜野湾市文化財調査報告書 第 8 集)』宜野湾市教育委員会・社会教育課、宜野湾 (沖縄)。
- 儀間進 (2000)『語てい遊ばなシマクトゥバ 続々うちなあぐちフィーリング』沖縄タイムス社、那覇。
- 城間字誌編集委員会編 (2003)『城間字誌 第三巻 「城間の方言」』城間自治会、浦添 (沖縄)。
- 国立国語研究所編 (1963)『沖縄語辞典』大蔵省印刷局、東京。
- 田代竜也 (2012)「沖縄中南部方言の与格の名詞と動詞とのくみあわせ」(琉球大学卒業論文)『琉球方言研究』第 3 号、pp. 80-98、琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室、西原 (沖縄)。
- 名嘉真三成 (1988)「沖縄糸満方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』第 33 集、pp.1-12、琉球大学教育学部、西原 (沖縄)。
- 西原町史編集委員会編 (2010)『西原町史』第 8 巻、資料編 7 (西原の言語) 西原町教育委員会、西原 (沖縄)。
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966)『琉球方言の総合的研究』明治書院、東京。
- Pellard, T. (2013)「日本列島の言語の多様性—琉球諸語を中心に—」田窪行則編『琉球列島の言語と文化—その記録と継承—』pp. 81-92、くろしお出版、東京。
- 法政大学沖縄文化研究所・小湾字誌調査委員会 (1995)『浦添・小湾方言辞典』浦添市小湾字誌編集委員会委員長、浦添 (沖縄)。
- 外間守善 (2000)『沖縄の言語と歴史』中公文庫、東京。
- 松原敏夫 (2014)「しまくとぅばの標準語」『(松原敏夫個人詩誌) アブ』第 15 号、pp. 43-44、浦添 (沖縄)。

宮里朝光・小那覇全人・崎濱秀平・宮良信詳（2006）『沖縄ぬ暮らしとう昔話』沖縄語普及協議会、那覇。

『琉球新報』（2001 年 5 月 27 日）「首里くとうばと琉球文化学ぶ」

『琉球新報』（2013 年 9 月 15 日）「座談会：しまくとうば再生」

Elbert, S. H., & Pukui, M. K. (1979). *Hawaiian grammar*. Honolulu, HI: University of Hawai'i Press.

NeSmith, R. K. (2003). Tūtū's Hawaiian and the emergence of a neo Hawaiian language. In K.

Ho'omanawanui (Ed.), *Ōiwi: A Native Hawaiian Journal* (vol. 3, pp. 68-77). Honolulu, HI:

Kuleana 'Ōiwi Press.

NeSmith, R. K. (2012). *The teaching and learning of Hawaiian in mainstream educational contexts in Hawai'i: Time for change?*. (Doctoral dissertation). Retrieved from the University of Waikato homepage. (<http://hdl.handle.net/10289/6079>)

Piccolo, F. (2005). *Where is the Hawaiian language headed?: A phonetic study*. (Unpublished master's thesis). Retrieved from <http://www.ling.hawaii.edu/research/WorkingPapers/wp-piccolo.pdf>.

Pukui, M. K., & Elbert, S. H. (1986). *Hawaiian dictionary* (Rev. ed.). Honolulu, HI: University of Hawai'i Press.

Schütz, A. J. (1994). *The voices of Eden: A history of Hawaiian language studies*. Honolulu, HI: University of Hawai'i Press.

University of Hawai'i (2007) *Hawaiian Studies 107 Hawai'i: Center of the Pacific Reader*.